

17世紀ドイツにおける市民のラグジュアリー： ダルムシュタット・ヘッセン州立博物館の衣装コレクション

服飾研究家 ヨハネス・ピーチュ

BOURGEOIS LUXURY IN SEVENTEENTH-CENTURY GERMANY: A COSTUME COLLECTION IN THE HESSISCHES LANDESMUSEUM DARMSTADT

Johannes PIETSCH, Costume Historian

A collection of examples of outer clothing made for rich citizens who lived in Cologne in the 17th century are included in the collection of the Hessisches Landesmuseum Darmstadt. Although many of the costumes in that age remain only in the form of pieces of cloth, these articles of clothing retain almost entirely their complete forms. In this sense, this is a very precious collection. These clothes worn by citizens have basically the same forms as those worn by royalty and the aristocracy, but regulations on dresses and other garments restricted materials and decoration techniques. Under such regulations, citizens adopted fully-contrived ornaments to establish their own fashion. Tailors' craftsmanship achieved sophisticated cutting and balanced proportion. In those days, construction techniques reached such a high level that tailors could materialize lines just as expected by their clients, enabling a perfect fit without wrinkles. These techniques were combined with beautiful and expensive materials. Looking at those dresses, we can see clearly how affluent German citizens in the 17th century enjoyed lives of luxury.

17世紀西欧の衣服におけるラグジュアリーを考えると、ヨーロッパのあちこちの宮廷で着用された高価な布地の輝きや金糸刺繍が思い浮かんでくる。そのような衣服は、今でもドレスデン（ドイツ）、ストックホルム（スウェーデン）、コペンハーゲン（デンマーク）のコレクションに収蔵されており、この時代の王侯貴族の衣装の最も大規模なコレクションである。しかし、ヨーロッパの大都市で裕福な有力市民階級がこの時代に勃興し、彼らが国際的なファッションの流行に従いつつ、独自のスタイルを持っていたことも忘れてはならない。

ドイツのダルムシュタット・ヘッセン州立博物館には、貴重な歴史的衣装の一級品が収蔵されている。それは目を見張るような17世紀の上衣のコレクションで、2008年、スイスのリギスベルクにあるアベック財団の特別展で展示された（原註1）。男女18点の衣装は1610年から1675年の間、ドイツ・ケルンの裕福な市民が着用したもので、それらはすべて、同じ都市、同じ市民階級に由来するものである。一般的に、こういった社会階級の衣服は数点の裂地が残っているだけであり、その意味で、このケルンの衣装は同種のコレクションの中で最も重要な収蔵品だといえる。

これらの衣装が残っているのは、バロン・フォン・ユプシュという名の収集家のおかげである。この男は18世紀後半のケルンで有名な人物であった。彼は、啓蒙主義の理想を掲げた博覧強記の学者として、百科全書的に分類した美術品、史料、自然標本、そして珍品を収集した。これらの収集品で溢れかえっ

ていた彼の邸宅を訪れることは、当時ケルンを旅する人の娯楽の代名詞であった。最後の訪問者のひとりにはナポレオンの妻、皇后ジョゼフィーヌで、彼女は見たものすべてに大変喜んだ。もともと、ケルン市に自分の財産を残すことがバロンの意思であったが、同輩市民とのいさかいの後、彼は自分のコレクションを、熱心な美術品収集家であったヘッセン・ダルムシュタット方伯ルートヴィヒ10世にすべて遺贈することに決めた。1805年にバロンが亡くなると、市民の衣服は、彼の収集品の大部分とともにダルムシュタット市に移され、1844年頃、ダルムシュタットの博物館に贈られた（原註2）。それ以前は厚紙の箱で保管されていたようである。これら衣装は、19世紀の間、ダルムシュタット城のいわゆる「旧博物館」で展示され、1906年にヘッセン大公国立博物館の新館が開館すると、第二次世界大戦までそこで展示されていた。戦後は収蔵庫の中で保管されていたが、2008年、70年の時を経てコレクションのすべてが公開された。

大ざっぱに見て、この衣装コレクションの特徴は、ダブルットやボディスなどの上衣だけで構成されていることである。上衣しかないのはよくあることで、組み合わせられるべきズボンやスカートは大きな布地から作られていたため、容易に新しい衣服に作り変えられたり、また、聖職者用のテキスタイルや祭服のために教会へ与えられたりしたからである。

上層市民の衣服に見られるカッティングや流行のラインは、貴族や君主が着用していたものと大体同じだった。これはコレクションの中でも最も初期のものに見られる。Fig. 1は、1620年にさかのぼる男性用ダブルットである。この時代に西欧の男性は、16世紀後半に全ヨーロッパを席卷したスペイン宮廷風のファッションから脱却し、国際的なファッションの流行は、今やフランス、イングランド、ネーデルラントが発信元になっていた。この赤いダブルットは、裾のあたりで前方に突き出した真っ直ぐなフロントラインを持つ新しいシルエットで、硬い立ち襟、ショルダーウィング〔訳註：アームホルの縫い目に取り付けて、肩の上に翼のように突き出したもの。〕、14枚の小さなタブが施されている。このようなダブルットに、幅広でゆるやかに垂れた膝丈のズボンが着用され、ぴったりとしたニットの絹ストッキング、大きなリボンのついた絹タフタ製の靴下留めがとりあわされた。市民が貴族よりも控えめに見せるためには、どの素材を選ぶのかという点しかなかった。これは、ケルンの上層市民階級が、衣服を着用する際、単なる個人的趣味の表現だけでなく、服装規定に則っていたことを示している。この規定は、それぞれの社会階層が衣服に用いることのできる素材を規定した法律で、例えば、生地や刺繍、ブレード、レースに金属糸を使うことは、貴族にだけ許されていることであった。

さて、このダブルットの生地は暗赤色の絹サテンである。ケルンの18点の衣服のうち13点の表地には、無地で光沢のあるサテンが用いられており、この時代、非常にポピュラーなものであったようだ。服装規定の中では、これが上層市民階級の用いる生地の典型として挙げられている。しかし、この無地の生地は、スリットやピンキング、刺繍、ブレードの縁飾り、レースなどの手の込んだ装飾で飾り立てることが可能だった。本品の装飾は、カード織の縁飾りと、下から黒い絹の生地をのぞかせている斜めに切り込みをいれたスリットから成っている。生地の地味さにもかかわらず、都市の有力市民層はラグジュアリーなスタイルを見せつける独自の方法を編み出していた。その意味で、ケルンの衣装は非常にバラ

エティに富んだ独創的な装飾を見せてくれる。17世紀の衣装でとりわけ注目されるのが、すべての衣装に付けられた贅沢なラフ、襟、カフである。これらの装飾はキャンブリックと呼ばれる非常に上質なりネンでできており（原註3）、しばしば手の込んだ最高級のフランドル製レースで縁取りされた。

ダルムシュタット・ヘッセン州立博物館の17世紀衣装コレクションの中でも、女性用のボディスは非常に独特である。男性が国際的なスタイルを身につけている一方、女性はネーデルラントの衣装に厳密に従っていた。ケルンはネーデルラントとそう遠く離れていない。17世紀にネーデルラントが文化的にも経済的にも主導権を握ると、その時代のケルンの富裕な市民は、かの地の裕福な貴族を自分たちの衣装の手本とした。ネーデルラント風の衣装を着ることで、ケルンの女性たちは自分たちの市民階級としての誇りを表現したかったのだ。

市民の衣服スタイルに見られるボディスはいつも同じ形である。その良い例が1625年頃のピンクのボディスである（Fig. 2）。このボディスは首まであるもので、小さな三角形の飾りで縁取りされた二つの硬いバスクが付いている。装飾は、下から白い生地がのぞいている小さなスリットから成っていて、縫い目の上とボディスの縁周辺は、小さなカード織のブレードで縁取りされている。前身頃の内部は鯨のひげで強化され、腰と肩の丸みを帯びた形は毛織りの芯地で成形されている。ボディスは背中の紐で締められ、同じく鯨のひげで強化されたコルセットをボディスの下に着ていたようである。女性たちは、そのような装飾的なボディスの上に、フルレングスで幅広の黒いローブを着用した。そのローブは前あきで、腰に詰め物をしてはいたペティコートがそこから見えていた。この衣装は大きなラフ、高価なレースのカフ、レースの被り物、金の鎖を腰の周りに付けて完成した。私たちは世界中の美術館で、このスタイルをオランダやフランドルの巨匠の絵画に描かれた市民の姿に見ることができる。ダルムシュタットの衣装コレクションの中には、オランダ風のボディスが合計5点残されている。それらはとても広範囲で着られていたにもかかわらず、ダルムシュタットのコレクション以外ほとんど見当たらないのは驚くべきことである。黒の絹のボビン・レースで縁取りされた明るい赤のボディスは、1630年代初めの形を表している（Fig. 3）。ボディスの丈が短くなるにつれて、バスクはより大きくなり、ネックラインは四角くなった。国際的に有名なテキスタイル・コレクションでさえ、この時代の黒い絹レースは断片でしか残っていないのに、この衣装に上質な黒いボビン・レースがたくさん残っているのは、大変珍しいことである。また、美しいディテールを他に挙げるとするなら、それは優美なパスマントリーのボタンで、ケルン市民の衣服に多く見られることができるものである。これら二つのボディスと一緒に着用された黒いローブも保存されていて、これが残っていることは服飾史にとって幸運なことである。残念ながら、ローブに縫いとめられていたフルレングスの襷のついたスカートは失われている。ローブは、無地のサテンと、二つの花のモチーフが交差する絹のダマスク織で作られている。そのようなダマスク織はイタリア産で、ルッカ、ジェノヴァ、リグリア地方で製作された。この記事は輸出されて、ドイツの大市、例えばフランクフルトやケルンなどで購入されたようであった。

ケルンでは、特に女性の衣服において、1650年頃までネーデルラントのファッションが支配的であったが、17世紀後半、全ヨーロッパのファッションの主導権はフランスに移った。このことはダルムシュ

タットの衣装コレクションにも反映されている。黄色のボディには1660年頃の新しい女性のファッションが見て取れる (Fig. 4)。このボディを見ると、この時代の絵画、特にテル・ボルフやフェルメールといった画家の作品を思い出す。新しいカッティング、広がったネックライン、短いパフスリーブを持つこのボディは、金や銀のレースと黒いシルクのリボンで贅沢に縁取られ、接ぎ線の丸みはそれ以前には見られないバロック的な形状を強調する。そのようなボディに、女性たちは同じく絹サテン地で床まで届くやわらかな髪を持ったスカートを合わせた。こうして、調和の取れたふさわしいシルエットを創り出した。愛らしいが、このファッションは快適さとは程遠いものである。ボディの内側を見ると、リネンの裏地に縫い込まれた鯨のひげがほとんど彫刻のような三次元の形状を作り出す構造が見て取れ、体を無理やりドレスの形に押し込んでいたのが分かる。

1660年頃の男性服の流行のラインに関しては、衣装コレクションの中に見事な例が残っている (Fig. 5)。それは美しい模様のある絹製の贅沢なショート丈のダブルレットで、高い立ち襟とスラッシュの入った袖がついている。精妙にとりあわされた素材の中で特に言及するとすれば、ひも状の羊皮紙を差し込んだ精巧な絹レースを挙げることになる。この衣装は市民の中でも最上級クラスの人物によって着用されたはずである。この特徴あるダブルレットは、ケルンで着用される前にイギリス、あるいはフランスで製作された可能性がある。というのも、現存するもののうち、同じようなダブルレットがイギリスのコレクションに残っているからである。このことは、ケルンの商人たちが持っていた広範囲な貿易網を考えると、特に驚くようなことではない。このようなダブルレットは本来、いわゆる「ラングラーフ」と呼ばれる短くて幅広のペチコート・ブリーチーズを着用して完成形となった。

これら贅沢な衣服に対し、1665-70年頃の短い黒のダブルレットは、より控えめで、地味な市民階級による保守的ファッションの典型である (Fig. 6)。しかし、市民はダブルレットの大きなダブルカフに、無地と模様のあるのを交互につけた、流行のループ飾りを捨て去ろうとはしなかった。バンド〔訳註：幅広でフラットな衿。普通はリネン、レースないしキャンブリックでつくられ、17世紀に男女両性にみられた。〕とリボンの織物は17世紀のケルンでは非常に重要で、この時代の男性服には欠かせないファッション・アイテムだった。そして、たくさんのバンドがケルンで輸出用に生産された。

ダルムシュタット・ヘッセン州立美術館の衣装コレクションをまとめると、高度な仕立て技術、洗練されたカッティング、それらがもたらす釣り合いのとれたプロポーシオンが特徴として挙げられる。仕立屋は、服地の芯、パッド、洗練された縫製技術など、見事な職人技を用いて三次元の形を作り出し、衣服にしわの無い完璧なフィッティングを実現させた。仕立ての技術は、17世紀には既に高水準に達しており、個々人の身体に、思い描いたシルエットを合わせることができた。そして、美しく高価な素材がこれらの衣服を生み出すために用いられた。これらの衣装は、17世紀ドイツの裕福な市民がいかに贅沢な生活を送っていたかを教えてくれる。

(翻訳：京都服飾文化研究財団学芸課 福嶋英城)

〈原註〉

1. Johannes Pietsch / Karen Stolleis, *Kölner Patrizier- und Bürgerkleidung des 17. Jahrhunderts. Die Kosümsammlung Hüpsch im*

Hessischen Landesmuseum Darmstadt, Abegg-Stiftung, Riggisberger Berichte 15, Riggisberg, 2008.

2. Philipp A.F. Walther, *Die Sammlungen von Gegenständen des Alterthums, der Kunst, der Völk erkunde und von Waffen im Großherzoglichen Museum zu Darmstadt*, Darmstadt, 1844, pp. 128-129.
3. Bianca M. du Mortier, "Costume in Frans Hals," in: Seymour Slive, *Frans Hals*, exhibition catalogue, Washington, National Gallery of Art, London, 1989, p. 46.

〈図版〉

- Fig. 1 暗赤色のダブルレット 1610-20年頃 ダルムシュタット・ヘッセン州立博物館蔵；Dark red doublet, c. 1610-1620. Hessisches Landesmuseum Darmstadt. Inv. no. Kg 93:19.
- Fig. 2 ピンキング付きピンクのボディス 1625年頃 ダルムシュタット・ヘッセン州立博物館蔵；Pink bodice with pinking, c. 1625. Hessisches Landesmuseum Darmstadt. Inv. no. Kg 52:13/1.
- Fig. 3 黒のレース付き明赤色のボディスと黒のローブの上部 1630-35年頃 ダルムシュタット・ヘッセン州立博物館蔵；Bright red bodice with black lace and upper part of a black over-gown, c. 1630-1635. Hessisches Landesmuseum Darmstadt. Inv. no. Kg 52:12 and Kg 52:13/2.
- Fig. 4 黄色のボディス 1660年頃 ダルムシュタット・ヘッセン州立博物館蔵；Yellow bodice, c. 1660. Hessisches Landesmuseum Darmstadt. Inv. no. Kg 52:10.
- Fig. 5 羊皮紙入りのレース付きダブルレット 1660年頃 ダルムシュタット・ヘッセン州立博物館蔵；Doublet with parchment lace, c. 1660. Hessisches Landesmuseum Darmstadt. Inv. no. Kg 52:4.
- Fig. 6 ダブルカフにリボンのループ飾りの付いた黒いダブルレット 1665-70年頃 ダルムシュタット・ヘッセン州立博物館蔵；Black doublet with ribbon loops on the double cuffs, c. 1665-1670. Hessisches Landesmuseum Darmstadt. Inv. no. Kg 78:6.